

nata; petiolum incurvum 1.5–2 cm longum, usque ad dimidium vaginans, alis primo obovatis membranaceis 1–2 mm latis mox mortuis caducis, cirrhis nullis vel evolutis et usque 10 mm longis; laminae ellipticae vel ovatoellipticae, herbaceae, 6–12 cm longae, 3–7 cm latae, subtus paullo pallidiores, apice acutae mucronatae, basi contractae acutae, costis 3 vel 5 subtus convexis, medianis 3 basi proximis supra basin 5 ad 10 mm discendentibus, nervulis secundariis gracilibus divergentibus. Racemi ex axilla prophyllata enati simplices, pedunculo petiolum suum superante vel aequante medio uni-bracteolato, axi elongato 2–3 cm longo, ramis divergentibus 10–15 mm longis umbella unica terminatis. Umbellae 7–10-florae, receptaculo ca. 2 mm erasso, pedicellis 6–8 mm longis. Baccae (immaturae) 5 mm in diametro. Flores non vidi.

Typus. Ostindien: zwischen Donk Bridge und Kishaganj. H. Kanai u. G. Murata 29. Juni 1960! (TI). Paratypus. Ostindien: Komurah Kali, südlich von Kalkutta. H. Hara u. H. Kanai 27. Mar. 1960! (TI).

Diese Art unterscheidet sich von der *Smilax polyacantha* primär in der Traube, die meistens vierdoldig an einem gestreckten Blumenstiel sitzt, gegenüber der normalen zweidoldigen Traube an einem sehr kurzen Blumenstiel der *Smilax polyacantha*. Die drei mittleren Hauptnerven, die über der Blattspreiten-Base 5 bis 10 mm verwachsen sind, gehören ebenfalls nicht zu der Art der *S. polyacantha*.

\* \* \* \* \*

サルトリイバラ属の新種と考定したものをインド及びタイから各1種ずつ記載した。両者共真正サルトリイバラ節に属する。インド産の方(第1図)は東京大学のヒマラヤ探検隊の採集品の一つで、マレー半島を中心に分布する *Smilax polyacantha* A. DC. に近いものと考えられる。一方タイ産のものはアジア熱帯に広く分布する *Smilax lanceifolia* Roxb. に似ている。

□ **Guide to graduate study in botany for the United States** 1966. The Botanical Society of America, Inc. Miscel. ser. 145 pp. 48 (1966) これはアメリカ植物学会が要望にこたえて、全米国内の植物学の Ph. D. (理学博士) 課程を設けている大学の 108 学部について昨年 6 月現在での教官とそれについて大学院学生のリストを主とし、教官の学位のかんたんな経歴や専門、大学院学生の論文テーマ等を附記したもので、いわばアメリカにおける大学の研究力の中核の一覧表ともいえるものである。ひどく小さい文字で読みにくいのが中々興味がある。Botany and Plant Pathology というのが多いことや植物園でも大学院コースがあるなど注目すべきことも目につく。東大・理学部植物学教室の図書室でみて興味を覚えたので御紹介する。(前川文夫)

□ 原寛監修 **The Flora of Eastern Himalaya**. Results of the Botanical Expedition of Eastern Himalaya Organized by the University of Tokyo 1960 and 1963, Compiled by Hiroshi HARA (東部ヒマラヤ植物誌) Octavo, pp. i-x. 1~744, map 1, pls. 1~8 (colour) 9~40 (black and white), published by University of Tokyo Press, ¥7,200. 原 寛教授を隊長とする東京大学東部ヒマラヤ植物探検隊は、1960年の3~7月、1963年の3~4月と9~12月、1964年の9月と長短4回の調査旅行で、約6万点の標本を採集製作し、さらに種子と生植物を持ち帰り、日本で栽培し研究を続けてきた。この探検隊の主な目的は、ヒマラヤと日本の植物相の関連を究明することと、第三紀の初期に共通の祖先から発した植物群が、日本とヒマラヤに遠く離れて現在のように違った型に進化した過程を解析することである。したがって、日本とほぼ気象条件の等しい東部ヒマラヤの温帯の植物相の探究に主力を注いだ。

この探検隊の主催で、東京と関西のデパートで開かれたヒマラヤ植物展で、われわれはヒマラヤの植物と日本の植物とが実によく似ていることを実物で示されて大変驚いたものである。またこの探検隊が撮影した数千枚のカラー・スライドを、色々な学会や研究会で断片的に披露してもらったが、1960年の春に、インドのサーニ古植物学研究所と共同で調査した第1回採集旅行の際の写真の中から100枚のカラーを含む221枚の写真が選ばれて、シッキム・ヒマラヤの植物 (Spring Flora of Sikkim Himalaya) として保育社から出版された。これは一種の写真帳であるが、いよいよ最後にこの探検隊の成果を純学術的に記録するために、37人の学者が分担して、表題のような英文の報告書が最近刊行された。

種子植物やシダ類ばかりでなく、蘚苔類、地衣類、菌類などの下等隠花植物まで多数の種類が記載され、新種や新変種なども少くない。種子植物の項では、各種毎に分布区域が明記してあるが、日本にも産するものが実に多いことに驚かされる。種子植物について日本と東部ヒマラヤとの対応種の分類学的比較が原教授によって論ぜられ、黒澤幸子氏は東部ヒマラヤ産の植物の細胞学的研究を発表している。また金井弘夫氏が日本との関連に注目した東部ヒマラヤの植物地理学的考察を記述している。

色々な障害を乗り越えて数回の探査を実行し、多数の標本を製作した努力もさることながら、それを多くの専門学者に分担研究を依頼し、短い期間にこのような大冊をまとめ上げた原教授の手腕に心から敬意を表する次第である。この研究は、本書の出版で終わったわけではなく、まだ未発表の資料も少なくないらしく、また本年も隊員を新しくしてヒマラヤに調査に行かれるそうであるから、いずれまた本書の増訂版が出版されることと思う。

希望者は東大出版会から7200円で求めることができる。(佐藤正己)

□ R. M. Schuster: **The Hepaticae and Anthocerotae of North America**, vol. 1, pp. 802, fig. 1-84, 1966. Columbia University Press. \$20. 本書は3巻からなる

予定のもので、その第 1 巻目が昨年末に出版された。著者は現在、苔類分類学の第一人者と目される人物で、マサチューセッツ大学の教授である。非常に精力的に仕事をすすめ、最近では南半球の苔類に関し非常に興味ある論文を次々と発表している。内容は、北米大陸のうち、東経 100 度以東に産する苔類を扱っているが、今回出版された第 1 巻では、苔類学全般の問題が論じてあり、むしろ苔類学教科書となっている。同じようなものに、ヨーロッパの苔類を取扱った K. Müller の *Lebermoose Europas* があるが、内容的には K. Müller をしのぐ本となっている。又、北アメリカの苔類については Frye & Clark の *Hepaticae of North America* があるが、これは最早や古典と呼ばれるものであって、今日的な意味はない。第一巻の内容は大きく 2 つに分れるが、初めに 105 頁にわたって苔類学関係の文献が上げてある（大体 1963 年まで）。1) General treatment では苔類の形態、細胞学、進化、系統などが論じられ、(2) では Specialized morphology and taxonomic treatment として、Jungermanniae の形態とコマチゴケ目、ウロコゴケ目のうちマタゴケ亜目、テガタゴケ亜目のものが論ぜられている。第 2 巻以降ではこの他の分類群が取扱われる予定である。専門の苔類学者で、しかも現在もっとも精力的に仕事を進めている著者が書いた本である点、各所にユニークな新見解が示されていて面白い。苔類学者のみならず、苔類の系統論に興味のある方はこの第 1 巻は見逃すことのできない本である。

(井上 浩)

○高等植物分布資料 (54) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (54)

○シコタンヨモギ *Artemisia laciniata* Willd. 本種は欧亜大陸の亜寒帯に広布し、近接地域では朝鮮半島北部、樺太、南千島に知られている。日本では北海道しかも礼文、利尻の両島と根室、知床半島先端部とに産するに過ぎない。この点はグイマツが樺太と南千島とに隔離分布しているのと軌を一にするものである。以上の産地は何れも海岸の台地草原や崖らしいが、ここに少し内陸部で北海道本島第 3 の産地が分った。十勝広尾郡大樹（タイキ）町の上更別（カミサラベツ）で、京大の岡本省吾氏が 1963 年 9 月 3 日に採集された (MAK-61987 標本)。ここは泥炭原野が拡がり、*Betula fruticosa* Pall. に近似のヤチカンバの基準標本産地でもある。要するにグイマツやヒメオノオレ（広義）（ヤチカンバとして存在するが）の如き、東亜北部の要素で東北海道に隔離分布するという種類に 1 例を追加することになる。

○チイサンウシノケグサ *Festuca ovina* L. var. *chiisanensis* Ohwi 西日本に普通なアオウシノケグサに似ているが、葉に縦溝があるので区別され、四国の山に知られるのみであった。これも横内氏が木曾谷上松（アゲマツ）町小川の 750~900 m の地（東経 137°40'）で採集された（1966 年 7 月 8 日）。葉の側面の溝は浅いが、十分に認められるのでチイサンウシノケグサと同定した。（東京都立大学 牧野標本館 水島正美）